

黒 赤 金

アイナー・シュレーフ

10月7日。共和国の建国記念日。彼女は窓から飛び降りる。花の海。数千人が歓喜の声を上げる。二時間後ようやく、救急車が到着する。パレードに巻きこまれていたのだ。

もしも、どうして。

肖像写真が泳いでいる。写真の被写体たちが、自分たちの若々しい顔に挨拶する。家並みの間をゆく流れから、音を立てて彼らの方にこぼれてくるものに向けて。押し寄せる洪水、その存在は隠すことができない。旗がついてゆく。

手術台の上で、彼女は検視解剖を受ける。埋葬が終われば、**黄色**は、自殺者の夫は自殺者をもう見ることができない。彼女はいつも危なかった。いつもそうしてしまいかねなかった。彼女はここに合わなかったのだ。**白**と**黄色**は混ざらない。ナポリの黄色はカプリの太陽であり、ベルリンの空には輝かない。**白黄色**は、子どもは母親を忘れるだろう。黄色の細目は泣き叫び、白い目は閉じたまま。まるで絞首刑に処されたかのように首と頭のまわりに刻まれた縫合跡は、水中でそれを歌う。観覧席のお歴々の似姿が泳いで通りすぎると、写真の被写体たちは彼らの似姿に挨拶する。似姿は行進の隊列の中、音を立てながら消えてはまた現れる。新たな人垣が合図を送る。新たな軍旗手隊、新たな行進の足並み、新たな戦闘班。それらは皆、ただひとつのことを望んでいる、没落を。観覧席の主は、古代の王のように指輪を底に投げる。すると国家の家畜は¹それは 99 パーセント、東ドイツに投票する家畜²底へと押し寄せる。その時、女が飛び降りる。幸運が舞いもどってくる。飛び込む者、泳ぐ者、潜る者、国民が指輪を吐き出すのだ。明るい色の背広を着たポリュクラテスが手を上げ、指輪を取りもどす。彼の鏡像を幾重にも掲げる流れとの結婚を証す指輪を。一方、下では、落ちゆく女が沈黙している。家畜民は口々に叫ぶ、万歳、東ドイツ万歳。

自らの似姿に³ 5 倦み疲れた指導者たちは背を向け、互いに年をとり孤独になったことを確かめ合う。彼らの孤独は壁紙、肘掛椅子、椅子の被いの中にうずくまっており、あたかも生なきものが生きさらばえ、終わりが近いことを知っているかのようである。「彼の日こそ怒りの日なり、世界を灰に帰せしめん」と足元から鳴り響く。これらの神々が、彼らの観覧席を取りもどそうとするかのように。観覧席での権力闘争は通過段階にすぎず、はるかに大きなものが待ちうけているかのように。古くなりすぎ、年をとりすぎ、ガスがたまり、汚れている。背広の内側の肉は腐臭を放つ。反ファシズムの防壁はもちこたえる。東ドイツのセメントは千年もつ。新たな帝国「東ドイツ」は、千年王国よろしく千周年を祝うが、古い帝国「ナチスドイツ」は五十周年すら祝えなかった。それは何百万もの死体の上に築かれていたのだ。

彼女がブレハブ新築団地で身支度をし、バルコニーの植物に水をやっている間に、新しい帝国のお歴々が彼らの観覧席に足を踏み入れ、彼らの似姿が隊列に集まる。彼女が髪をとかし、もう一度浴室に行き、グラスを片づけると、パレードの人垣ができていた。この党活動員は香水をつけながら、すべてを片づけた。二人の女たちが鏡を覗き込んでいた。一方は「不良品」と呼ばれ、他方は「品質管理」と呼ばれた。不良品が窓を開けると、品質管理は東ドイツ人民車を降り、自分でアイロンをかけて持参した旗を広げた。不良品の方は、自分の党のペナントを高く掲げ、今や九階から身を投げようとしている。建国記念日の挨拶。^{しよくざい}贖罪の犠牲。ここには合わない女。黄色はどこかに出かけている。白黄色は遊んでいる子どもたちのところに。彼らは夢中になって、パレードのために支度する。白は耐えることができず、落下しようと思わずにはいられない。コンクリートに。通りに。プロレタリアートの闘争の広場に。素晴らしい朝。女は落ちながら体をひねり、両腕を上には伸ばす。まるで空中で止まろうとするかのように、まるでまだ支え、枝、岩、つかめるところがあるかのように。それから板飛び込みで学んだとおりに、両腕を下ろす。今や転落する者は飛び込む者になり、接地を意識している。衝突の寸前に彼女の体はななめになる。茂みや低木なら、飛び降りるをまだしも緩和することができただろう。しかし体をひねったことによって、コンクリートの方に落ちた。出血はわずかだったので、拭き取られることはなかった。なおも数箇月、黄色と白黄色はこの路上を通るだろう、黄色は白黄色の手を引きながら。倉庫で写真の似姿たちは新たに整理される。建国記念日の後、新しい祝賀行事が続いた。次第に寒くなってくる時期。国民は電車、食堂、映画館、バラック住宅、劇場で座り、暖をとり始めた。彼らはひたすら食べ、ひたすら糞をする。不安を呑みこもうとするかのように。高脂肪の粥はあらゆる思考を麻痺させ、壁の向こうを見たり、飛び越えようと思わなくなる。飛ぼうとするのは、もうわずかな者たちだけ。気の狂った男が自分の部屋で、バルト海を折り畳み式ボートで渡る練習をして、逮捕された。熱気球の乗組員が訓練し、〔それぞれが壁を飛び越えた〕数年後にハリウッドで再会した。仮にあなたが墜落したとしても。私たちは最悪の事態を覚悟しつつ、下ではなく、目標を目指して上に向かおうとした。

ベルリン・シャリテ病院の廊下で、検視解剖を受けた女の夫が待っている。そこに彼女は横たわっている。本当に彼女を見たのかどうか、彼はもう思いだせない。

国民が歌うとき、どの番組でも、没落について、故郷について、新しいバナナについての歌となった。一方、壁の向こう側でもう一つの国民が、安値が続くバナナをいかにして高くするか議論していた。まだだ。しかし間もなくだ。人民所有企業のセメントも永遠にはもたない。東ドイツラジオは、進歩、未来、そして崩壊の進歩を報道する。新たな隊列ができる。家畜民は無気力になる。開かれた家畜小屋から、バーベキュー場から^{ほうこう}咆哮が響いてくる。肖像写真たちが聞く耳を鋭くしたら、メッキが音を立てて割れたのだ。くさびの枠が張り裂けそうだ。新たな戦いに備えた行進班。行進に備え、戦いに備えている。自動小銃の引き金に指がかけられる。かつては国有だったインテリたちが、変革を試みる。灰色一色の中から、灰色の顔がのろのろ歩いてくる。開かれた家畜小屋は空になる。工場も。そして洪水警報が告げられ、国家の船が沈んだ。国有の芸術家たちは人民の指導者となった。劇場の

叛乱。今のところはまだ無血の「六月十七日」といったところ。建国記念日の贈り物が、その棺の中で腐敗する間に。その予兆は地下に横たわっている。いや、広場が満たされた。名もなき衆が集会を開こうとしたのだ。リーダーは壁に抵抗しようとする。破壊か、さもなくば崩壊だ、と。壁は亀裂を生じ、内部から崩壊した。一夜にして。寒くなる。通りでは、灰色の者たちが踊った。その夜はあらゆる色で輝いた、ぬるぬるした物とカビの生えた骨に満たされて。ハエとあらゆる動物。夜が死体をことほぐ。お前は仕上げの要石なのだ、お前は礎石なのだ。鉄の夜によって町はよみがえったのだ。その一方で、肖像写真たちは燃え、花崗岩、粘土、陶磁器でできた肖像写真の被写体たちは倒れて何階も下まで落ち、図書館、講堂、本部、装甲室から紙の山があふれ出てきた。書類の山の中で、群衆、民衆、国民が自分自身の過去を確かめ、ついに決着をつけた。書類は、肖像写真の被写体たちが彼らについて、すなわち、被写体たちを写す者たちについて記したものだ。写真を撮る者たちは、彼らが仕上げた肖像写真をよりまっすぐに掲げて、被写体たちの観覧席の前を行進しようとしたのだ。ナルキッソスは自分の姿を見て、罰を受けた。彼は手のひらで自分の肖像を水からすくい取り、それが彼の手中で流れ去り、彼の指の間からただ太陽だけが顔をのぞかせるのを見た。今度は肖像を水からすすって飲もうとし、身をかがめる。近づくにつれて彼の肉体は消えてゆき、髪はもう泳ぎだし、鼻と目の上を漂い、それから彼は水に口をつけて飲む。もう遅い。罰は下された。前庭も、邸宅の建ち並ぶ通りも、武装した警察官たちも、掃除機の隊列も助けにはならない。誰も助けてはくれない。彼は孤立無援だ。彼は水に落ちる。自分の腹、腋、肩をなめる。自分の臭いで、彼はまだ生きていることを知る。彼は彼を忘れる。何千ページもの書物が彼の物語を、何千もの造形美術が彼の人生を伝えている。建国記念日の贈り物は彼らの鏡像を、コンクリートのプレート、粗悪な砂利、ハマアカザ、スイバの間に押し込んだ。

お前は母親として、あらゆる灰色の中で黄色と寝ることについて釈明をしたのか。彼の目の中で、お前の似姿は列をなして輝く。お前たちの愛の毎日。白黒かカラー。カラフルなのは、シーツと
だいたい 大腿の間。しかし視界は暗くなってゆき、灰色に屈する。意識を失い、倒れ、死ぬ。建国記念日の贈り物は食べ、飲み、トイレに行く。模範的であるのは、わが子を見捨てる母親、飛ぼうとした鳥の家畜。彼女が上を目指して下に落ちるのを、イカロスは予見していた。

赤

どうすれば私は喪に服せるのだろう。

悲嘆者は同じような悲嘆者を本当に認めてあげられるのだろうか。お前の妻は飛び降り、私の妻は壁に向かって走った。冷たいセメント、コンクリートのプレート。鳥の群れがベルリンを横切る、西側の寝床から東側の餌場へ。毎朝、毎晩、毎冬。東のスターリン通りを経て、ブランデンブルク門、そして西の「六月十七日」通りへ。眠る。死者たちの眠り。発電所の暖かい気流に乗って、ベルリンの

空に、目に見えない帯がたなびいている。近づくことができるのは鳥たちだけ。気流は二つの部分をひとつにする。この気流は「東西風」と呼ばれる。

プレートの町で、建国記念日の贈り物が刈り取られる。絞殺者はまだ徘徊し、旅券を携えた詩人たちは歌う。彼らは東の灰色を後にすれば、二度と戻ってくることは許されない。頭の中で考えたことでも比喩でもない。忘れる。観覧席は沈黙している。入国がふたたび許可されることはない。

悲嘆者は悲しみを、絞首刑に処することができるのか。喪服を、眠れないことを、思考を苦しめることを、悩ませることを。戸棚の中に、あるいは本のページの間にしまいこむことができるか。思い出。あれはお前だった、あれはお前と一緒に私だった。これは私の黄色の家族だ、これはお前の白い祖母だ。見てごらん、彼女がどれほど器用に箸で食べるか、彼女がどれほど孫の**白黄色**を愛しているか。もうすぐ彼は走ってディスコに行き、自転車ですらかり、コンクリートのサイロの間で煙草を吸う。彼女ができるが、隣室のベッドで泣きわめき、うめき声を上げ、むせび泣き、彼女にめそめそ言う。僕を愛しているの。建国記念日の贈り物は草であり、それは枯れ、乾き、飼料にはならず、飼うウサギさえそれを食べようとはしない。しりごみする。血の臭い、死臭、あるいは陰気臭さをかいだからか。ウサギは食べようとしな、もうたくさんだ。こんなはずではなかった。第五帝国。それは、さらに新しい新しさ。**黄色**が今、鏡を覗き込むと、黄色は老け込んでいた。男が子どもになる間に、

ろくざい 肋材が折れる。船が沈む。荷物を積みすぎたのだ。まず何から捨てるべきか。本、写真、機械か。最後にすべての肖像写真を三冊の本に押し込み、それらを海に捨てる。建国記念日の贈り物は、かび 黴、ぜんちゅう 蠕虫、げっしるい 齧歯類、汚物だけ。腐植土もいいところだ。大地の肉体とひとつであること。私は落ちる。私は飛ぶ。私は叫ぶ。灰色一色にコンクリートの雲がかかる。樫の木が茶色に燃える。写真、野獣と化した顔。スーツ、ネクタイ、カラーが窮屈だ。白いドイツ人、きちんとした男。お前は不良品だ、ごみ溜めに捨てられている、小便と犬の排泄物の間に。お前はそんなに青ざめ、そんなに痩せこけている、お前は別人、私ではない。凍えているのか、生きたいのか。

お前はまた戻るのか。答えはない。今、慰めとなるもの。お前を失ったことを埋め合わせるもの。男は自分ひとりでそれを解決し、「まだ目覚めている」と「まだ寝ていない」の間で、体は起き上がってお前の方へと向かい、彼の指は胸に触れると、その下ですでに死んだものが新たに生きる。彼は彼女の体の匂いをかぎ、味をたしかめる。指の間で彼女の乳首は燃え、彼女の肌は彼の肌に押し込まれる、まるで見えない空気が押し寄せる彼の体に応えるかのように、まるで自分の肉体が彼女の肉体であるかのように、彼の手は自分の体をさする。体は本当に覚えているのか。お前は別の肌を必要とするのか。**黄色**は**黄色**の上に、**白**は**赤茶色**あるいは**青**の上に。肌が肌。お前はすべてを忘れてしまい、今、私たちの間で暮らす。お前はお前の影を見て、家にいると思う。そうだ、そこでは**黄色**が**黄色**に向かって走ってぶつかり、お前も逃げ出した、お前の夫を知っているのはお前だけだ。

通いなれた道。それらは、未知の場所でも、もう足を踏み入れない一角でもなく、隅々まで知っている。化粧塗りがはがれているところまで、穴だらけの壁面が裂けているところまで。階段、段、道がぶつかるところ、そこを私は行進して通りすぎた。私の通学路、私の妻のところへ、私の子どもたちのところへ、愛人のもとへ、医者と医者間の路面電車への道、街角では……。やめろ、もう思い出すな。忘れろ。私がこの場所で再会できるようなものは、何もない。誰も銃の後始末をしていないことも、これほど歳月が経ってから私が帰ってきたことも苦々しい。複雑な思いで壁を探してみるが、それは取り壊され、すっかり忘れられている。ドイツは白い、毎年冬に飛行機でベルリンに向かい、壁を上空から探すたびに私はそう思った。夜に壁は、みずからの潔白を象徴するがごとく輝いた。そう見えるほど、私は久しく東ドイツに足を踏み入れなかったのだ。

入国許可は与えられなかった。私は緑の入国カードを取っておくことにした。理由説明がないまま拒否された。西側にいて出入国を管理する東の警察官。私は用紙に記入した、二度も、屈辱的な思い、疲れ果てて。どうして私を追い出したのだ。なぜ入国許可がいるのか、東ドイツ人の私に。他の東ドイツ人は入国しているのに。私に忠告する声が聞こえる。ほらやってみろ、窓から飛び降りるんだ。それを実行した人々を、私はどれほど多く知っていただろうか。ベルリン・ツォー駅の向かい側、東ドイツの出張所で反ファシズム防衛戦争中の緑の制服たちが行進。入国許可。旅券の発行。制服行進の連中が私を笑った。おれたちがあんたをどう思っているかは、もう分かっているだろう、と言わんばかりに。

その場所が殺人者を誘う。犠牲者も同様に。

こうして私はベルリン中をさまよい歩いた、どこにいるのかも分からず、もう壊れた壁に上ろうという気にもまったくならなかった。私は近づかなかった。私は、他の人々が思い出を馳せようと、懐かしの場に居合わせたり、そうした人々の手助けを申し出る光景を見ていた。しまいには東ドイツの男たちは、もう思い出の価値しかない時代遅れの東ドイツの旗を買った。建国記念日の贈り物は、路上に十分に横たわっていたのだ。

東ドイツの共和国宮殿は空になり、レーニンとマルクスを彷彿させる街や通りは、今では昔の名に戻った。男爵たちは農業生産協同組合の受賞者に変わった。彼の憂鬱は地獄の美ほどに深い、と党活動員たちが仰向けの姿勢で言う。レーニン像はクレーンの絞首台に吊るされて、共和国の広場を引きずられる、まるで彼が罪を償わなければならないかのように。彼は絞首台で揺れる。彼の最初の肖像。彼の最初の立像。東ドイツの聖物。今ではトイレと食堂の廊下の間に隠されて、階段の暗闇で威嚇している。小説が彼を賞賛し、耐え抜くことについて語ったものだが今では彼は汚物だ。古代の仏陀同然。建材としての価値もない。無価値。早朝にクレーンに吊るされ、随行者もいない。ぶらぶらと揺れて、ウンター・デン・リンデンの国立図書館の方へ、そこで彼は学んだのだ。古典作品、革命前の作品、それらは安全な書架で、彼がクレーンに吊るされて広場をゆくのを眺める。反動が書架で勝利を収める。何千回も。何百万ページもの本が、彼の終わりを祝う。ユートピアはいらない。共産

主義はいらない。ナッシング。クレーンは彼を舗道の敷石に寝かせる。革命の道具、その言語。覆いに包まれてブロンズ像は揺れ、横たわる。鷹揚おうようなロシアの労働者のパトロンは泰然自若たいぜんじじやくとしている。いまやブロンズ像はひっかき傷をつけられ、打ち壊され、糞尿をかけられようとしている。千年眠れ、鳥がお前を起こすまで。

金

地下鉄たてこの立坑から、水が噴き出してくる。洪水が近づき、土台を洗い流し、家並みを浸食し、すべての非常水位を超える。洪水は引かずに、新たに水位を増す。さまざまな支流が合わさり、地形は急激に方向を変える。避難しない者は溺れる。ベルリンは周辺地域とひとつになり、バルト海は嵐のように近づき、北海の暴風雨が加勢し、この都市はもはや安全ではない。思いたすことができる者は、洪水で水浸しになったトンネルのことを、スターリンのオルガンの歌のことを、耐え抜こうとする意志のことを、終わりが何を意味するかを知っている。止まることはない。様々なものが合わさるが、調和も、排水も、治水もままならない。

この都市はその没落を夢に見る。それは戦争か、来たるべき洪水か、雹ひょうか、吹雪か。ベルリンは海辺にあり――そのことを画家たちは夢に見る――高く水しぶきを上げる洪水は、建物の裏庭と瓦礫の間でひだ飾りとなる。しかし現実においては、排除された者たちが飛ぶ。彼らは自らを排除する。飛び降りようとする者たち、彼らは飛び降りる。橋、高層ビル、地下鉄の立坑、すべてが処刑場だ。都市の破裂した身体の上を、再生の洪水じゅうりんが蹂躪する。それは破壊ではなく再建、病人の包帯の消毒、小さな切断――つまり、プラスチック製の義肢が生身と同じようにスムーズに動き、体にじっくり馴染むためのものだ――今やひとつの国家が支配する再生の都市、ひとつの精神、ドイツの恩寵による復興の統一の精神。この精神こそが新しい帝国を倒したのだ。そしてもっとも新しい国、第五帝国を創始するであろう。ドイツの壮大な構築物を。その前に、多くのものが消えなければならない、ネロもローマに放火したではないか。ここで放火したのは誰であろうか。ドイツの新たな出発のために。そのとき、飛ぶ者たち、なすすべを知らない者たちは意味をなすのか。街角の女、掃き集められた血、遮られた交通のリズム、技術的な欠陥による休止は意義あるものになるのか。個人は意味をなすのか。都市は自らをただ集合、集団、群衆としてのみ理解する。支配しているのはアリの行列、一種のせんみん賤民、まっすぐに歩けない。直立歩行は個々人によってたえず求められるが、一様に都市、すなわち大きな雑踏の犠牲となる、しかも自由意志で。だが、それが入場券なのだ。

近郊電車は、終点から別の終点まで数時間かかる。今日なお、過去とは何なのか。東ドイツは磨き上げられたプロイセンの国家建築に脂ぎった巣を作る、まるでその中には「社会主義の優等生」以上の東ドイツが存在するかのように、まるで金が、薄い純金が、大量生産品の――それはドイツの大量生産品と呼ばなければならない――安価になった党员バッジが輝くかのように。今や、誰がもう飛び降りた

と思わないだろうか。実際彼らは飛び降りる。絶えずバルコニーのドアが開かれる、非常ブレーキをかけた列車、地下室、トンネル。ドイツ国家は、変化へのたゆまぬ再生を祝っているが、その結果ドイツの昆虫の群れは 繭まゆの中から、急降下を準備するようになる。そのことを都市は夢に見る、復興のさなかに自らの破壊を夢見る。クレーンによじ登り高所の工事現場に身を潜めた男は、数時間におよぶ説得の後、計画遂行を断念する。「今日もすべてうまくいったな」、晩になってテレビのニュースにかじりつく人々は、わが町でその日に起きたすべての出来事に対して、そう安堵する。でも、このすぐ近くの道は、物々しい警備がついた中継車やケーブルゆえに通行止めになっているのだが。

再統一した都市とは何か。

世界史的な時代、分断した二つの都市は、敵対する宗教、敵対する国家、敵対する思想が相対峙する聖地となった。国境の往来はわずかだったが、それによって彼らの傷口が洗浄された。避けることのできない膿から、体全体に毒が回ってしまわないように、やむをえない切除、病気にかかった体肢の切断が成功裏に行えるように。

彼らはまたもや飛び降りるが、泳者のような飛び込みはほとんど期待できない。泳者の飛び込みでは、空気が分かれ、目に見えないものが落下する身体をなでる。それは数え切れないほどの微粒子であり、柔らかい風やうなり音、変幻自在の聴覚となって現れるかのよう。水が、愛撫として、前進のしるしとして体の上を滑っていくなんて！ もしも空と肌が一体となり、泳者がゆっくりとトランス状態に陥っていくのならば、彼はあたかも働いていないかのよう、働いているのは別の、未知の身体であるかのように、まるでそれが彼を、考える者を運び去るかのよう、まるで彼がそれに身をゆだねることができるかのように、まるで彼が類まれな平静さへと、限界へと進むかのように、そして自分の体の下からあの未知の身体が見えてくるかのように、普段の思考が沈静し、見えないもの、思考不可能なものを許容するかのように。そのとき水は体を受け入れて運ぶ。この和合から、このまどろみから泳者は逃れて、もしまだ可能であるなら、まっすぐ岸へ向かう。

無能について、無気力については、都市の何百万もの寝室やソファー式、つまり、まっすぐな足どりを余計なものとするすべてのものが物語っているではないか。

建設工事用クレーンの中でまだ議論を続け、何度も飛び降りると断言する男に都市は開かれている。男の視界からは、深くたなびく雲、新築の邸宅、すでに風化した金の中に都市が開かれ、それは地平線まで広がるように見える。都市の近郊は洪水に呑み込まれている。男はそれに気付いたか。下にいる警察官は、意義深い人生についてあまたの無駄口を叩いている。男はそもそも聞いているのだろうか。テレビチャンネルが私たちの顔と居間に吐きかけるものを、ケーブル線を経て建物の防火壁を越えて打ち寄せるものを。彼はそれを聞いているのか。あるいは、ざわめき、洪水、上がってくる大水の音を聞いているのか。水はこの街を征服しつつある、それは東から来る者、文明人というよりむしろロシア系アジア人。文明人なら、飼い猫が新しいリビングユニット棚の上でうずくまるような自分

の戸建て住宅が水没したことを悲しむのだが。ビル建設現場のクレーンに乗っている男は、軍隊も見かける。彼らは準備に取り掛かり、^{ほしろう}歩哨を立て、側面を強化する。嵐の予告が出される。大水が引いた後、死体は火葬されない。これまで没落した都市は火葬の費用が工面できた。その子孫たちはさまざまな大陸を横断して移動展覧会を開き、燃える死体の山の光景をいつでも展示できるようにした。それによって、歴史の過酷さの前では、協調政策など無効に等しいことが示せるのだ。党の綱領、選挙公約、憲法、権利、市民が何の助けになるだろうか。それは、すべて目に見えない環境危機の、汚染された漂流物にすぎない。だがそれを、最近の若い危機管理者たちは、アルマーニクラブでのビジネスランチのように片づけたつもりでいる。

都市の上にいる男は、歴史的な場所に何を見るか。建築や解体、洪水を。メルヘンや詩人によってではなく、テレビのチャンネルにおいて描かれるものを。空は巨大なスクリーンであり、デジタルで宇宙から操作され、一面にケーブルを敷かれ、ネットワークにつながれている。しかしこの世界中に広がってゆく水に対して、泳者はそれを慌ただしく渡ると詩人は言う。温かい、温められた水面は甘ったるく、脂っぽい汚物の味がし、水力を増しながら離れ離れになり、髪と髭にまとわりついて臭いを発し、真珠がこめかみ、まぶた、唇の上を流れ、再び混ざり合い、泳者のはるか後ろで深みに閉じこめられる。撮影チームとレポーターが水流に立ち向かう。大臣たちや水害の専門家たちが議論しても無駄だ。首相、防衛相、国家評議会の議長、指導者は役に立たない、どの政党の党員であっても意味がない。

数秒間、都市は沈黙する、一面の灰色、都市が自らの上に、壁のように向かい合わせに積み重ねる物音は沈黙する。数秒間、宇宙は揺れる。それは動く。大地のいかなる変動も予知する動物たちでさえ、沈黙している。身をよじりもしない。すべてが待ちかまえている。コンピュータはカチリと音を立て、すべてが叫び、群がり、めそめそ泣く。飛ぶ者たちは大勢で落下し、アウトバーンの橋は波打ち、重荷に耐えかねて崩落し、重荷は衝突して互いに食い込み、家の壁はもっと早い調子で次々と崩れゆき、列車は三倍の速さで互いに食い込む。静けさが訪れ、機械が動いて熱くなり、たなびく煙が都市を取り囲む速度が遅くなる前に、煙は水位を増す洪水とともに、上りつつある地平線の月に向かってゆき、それを暗くする。月は破滅の全容を見る前に、もっと高く上らなければならないのだ。これらすべては、善を望んだ人間たちのせいなのか。今や人間どもはどこかで、彼らの飼い豚や釣りざおのかたわらで腐乱する。

お前は九階から何を見たのか。あの時。東ドイツ時代に。すべてが崩壊するのを見たのか。救急車は二時間を要した、毎時間ごとに新たな出動。お前が三途の川を渡る前の、最後の休息の場所。舌の下にはガム。

お前は何を見たのか。お前の何が残されたのか。黄色は何を、白黄色は何を持っていったのか、写真、焼痕となった思い出、数秒露出された死、彼女がお前のもとを去る前に、ゴムボートが彼女を運び去る前に。没落の都市が後に残される。一面の灰色、ハタラキアリたちは、磨かれた不安の中で喜びに

押しつぶされている。パニックになり、酸を飛び散らせながら穴から逃げるが、それは彼らをますます呑み込んでゆく。静止した洪水は今や、渦となる。

(1996/97 年執筆)

初出：ハノーファー・ケストナー協会主催「アイナー・シュレーフ展」黒・赤・金/信仰・愛・希望（2002 年）のプログラムノート所収。この文章は成立時の経緯との関連では、本書によって初出となる。

(訳：津崎正行・平田栄一郎)